

たとえ一時でも、 被災地から子どもたちを 連れ出したい。

岩手県にある遠野市レクリエーション協会は、東日本大震災の直後から被害の大きかった沿岸部の子どもたちを遠野に招き、思いきり遊んでもらう「日帰り遠足「恵みの森」自然学校」を行ってきました。
今年で3年目を迎え、合計42回実施されたこの活動には、
のべ1519人の参加者と1322人のボランティアが参加しました。

私たちの得意分野は、
遊ばせること。

東日本大震災の発生から約1ヵ月後の2011年4月17日。遠野市レクリエーション協会は、当時、大槌町赤浜小学校で避難生活を送る子どもたちを迎えに行きました。被災した車や打ち上げられた船、津波と火災による瓦礫と強い臭いが残る町を通り赤浜小学校に着くと、小学生14人、中学生6人、高校生2人の子どもたちがバスに乗り込みました。そこから始まったのが、遠野市レク協会の支援活動「恵みの森」自然学校です。

津波の被害が大きかった沿岸部の子どもたちを自然豊かな遠野市に迎えて、一日、思いきり遊んでもらう。そうした計画が話し合われたのは、活動当日のわずか6日前、4月11日のことでした。

た。日本レク協会が、遠野市社会福祉協議会や地元NPO団体・遠野まごころネットと支援方法について話し合った際に、「子どもたちを、一時的でも良い環境の中で遊ばせたい」という支援のニーズが出てきたのです。それは、同席していた遠野市レク協会事務局長の佐々木高弘さんも同じ思いでした。

話し合いの後、すぐに大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市を回ってみると、避難所は大きな声を出したり走り回ったりできず、外にはがれきが広がり悪臭が漂い、学校の校庭には炊き出しの道具が置かれたり支援関係の車が停められていたり、遊ぶスペースがほとんどない状態でした。災害ボランティア・センターを訪れると、子どもたちへの支援が必要とされていることも確認できました。遠野市レク協会のメンバーの一人、菊池剛さんも、現地を見に行つたと

きの様子について、「これでは遊べないな」と感じたそうです。

「私たちの得意分野は、子どもたちを遊ばせること。今こそ、その力を使わなければ」。そう思った佐々木さんたちは、すぐに沿岸部の子どもたちを遠野に招く支援活動を始めることにしました。

一つひとつ乗り越えていった、
運営の壁。

「自然学校が行われた柏木平レイクリゾートには、傾斜のある草原があるのですが、子どもたちはそこを転がっただけで『うれしい』と言っていました」と、



ボランティアの方と一緒に、大なわを楽しむ子どもたち。体を思いきり動かす喜びに、あふれています。



津波に街が飲み込まれてしまった大槌町(上)。第1回目の自然学校で、傾斜を転がるだけで「うれしい」と言っていた子どもたち(左)。

●特集●
東日本大震災
子どもたちへの
レク支援





子どもたちと一緒にバンブーダンスを楽しむのは、「つよぼん」こと、菊池剛さん。保護者から、「今日来てよかった。楽しんでいたし、見ていて安心できた。子どもも「大声出したよ」と言っていた」という言葉をもたらしたことなどを挙げながら、「ここまで続けられてよかった」と話します。

第1回目の様子を振り返る佐々木さん。子どもたちが、いかに遊べない環境にいたかを物語る一言です。

5月に入り、親子で参加できるようにすると人数もグッと増え、一度に45人の小学生が参加することもありました。ずっと会えなかった子どもの親同士が震災後初めて集まる機会にもなったそうです。

しかし、自然学校の運営をそこまで軌道にのせるには、さまざまな苦労がありました。子どもたちの送り迎えをするバスの手配をしたり、募集のチラシをつくって配ったり、ボランティアが足りなかったり。けれど、そういった苦労を佐々木さんたちは、全て乗り越えました。

「バスは、第2回目以降は同僚の実家が経営するタクシー会社が協力してくれて、安く借りることができました。ボランティアの手が足りないときには、岩手県レク協会や他の地域レク協会、地元

のバレーのチームなども手伝いにくれた。ボランティアのための研修会に協力してくれる先生も現れ、子どもたちの心のケアについても学ぶことができた。本当、絆ですね」

回を重ねるうちに、「保育園児の参加も多いから、幼児コーナーを設けよう」「遠野に縁のあるカップパの着ぐるみを着てみては」「親も被災地での生活に疲れている。親向けのプログラムもやらないか」など、遠野レクのメンバーからさまざまな案が出ました。これらのアイデアは全て採用され、子どもはもちろん親からも大好評。ポケットティッシュのケースを縫うなどの親向けプログラムでは、縫っているうちに自然と心の内を話す方が多く、気持ちの安定にも一役かついていたそうです。

こうした支援は、被災した方たちの居場所が、避難所から仮設住宅へ移っても続きました。校庭に仮設住宅が建ったり公園がなかったりと、子どもが外で遊べる場所がない。仮設住宅で騒ぐ子どもたちの声に、最初は寛容だった大人たちが我慢できなくなり苦情が出てきた。学校の学年行事や親子行事も、実施する場所が限られている。——そこで、遠野市レク協会の支援活動は、子どもたちの外遊びと被災地の学校行事の受け皿としての役割を担うようになったのです。

徐々に変化していった子どもたち。

遠野市レク協会が活動をはじめから、3年。参加する子どもたちにも、徐々に変化が現れてきたと佐々木さんは言います。

「活動を始めたばかりの頃は、退行現象というのでしょうか。小学校4年生くらいの子が、突然保育園児のように『帰るー！』と、駄々をこねたりしていました。けれど今は、その影もありません。元をたどれば、親なんでしょうね。親が落ち着いてきたから、子どもも落ち着いてきたのではないのでしょうか」

2013年10月6日をもって「恵みの森」自然学校は、とりあえず終了となります。『とりあえず』というのは、安心して遊べる場所のない子どもたちがまだまだいるため、要望があれば今後も行っていこうと考えているからです。

3年間、カップパの『かりんちゃん』の着ぐるみを着て子どもたちを喜ばせてきた菊池和彦さんは言います。

「最初の頃は、カップパの私に抱きついてくる子がたくさんいて、安心感や安らぎに飢えているのかなと思いました。でも、何度か来てくれる子を見ていると、表情が少しずつ明るくなってきているのがわかって、徐々に普通に帰ってきているように感じましたね。私としては、がれき



盛り上げ上手の岩手県教育レク研究会の室岡秀典さん。活動をはじめから現在まで変わらず感じるののは、無邪気に遊ぶときの「子どもの笑顔」だと言います。そんな笑顔を見るたびに、レク支援をやって良かったと逆に励まされたそうです。



「子どもたちを笑顔にできたら…」という思いで参加したという杉本聡美さん。心の奥底では、まだまだ抱えているものがあるはずなのに、それを見せずたくましく成長していく子どもたちに、自分も負けていられないと感じるそうです。

東日本大震災 子どもたちへのレク支援

やガラスなどがない、転んでもケガしない環境で遊びに集中してほしかった。今もつとやつてあげたい、物足りないという感じですね。だから、要望があればいつまでも続けていいと思っています」

優しく包み込んでくれる、お母さんのような存在の菊池弘子さんも活動を始めた当初を思い出して、涙を浮かべながら話してくれました。

「あのときは、つらかったですね。にこにこ笑って遊んでいた子が、突然泣き出して……私は抱きしめることしかできませんでした。その子が経験したこととは、本人じゃなければわからない。今はきつと、元気になっていると思います。遊び場はまだないでしょうけれど、この活動が終わるのも次につながるいいこと。終われるくらい、心の復興が進んでるのかなど。ちよつぷりでも手伝えて、よかったなあとと思います」

菊池弘子さんの誘いで、遠野レク協会のメンバーとして活躍する菊池静江さんも、これまでの心の内を話します。

「1年目は、言葉一つにも気を遣うピリピリした雰囲気、子どもを見ると痛々しく感じていました。でも、2年3年と経つうちに徐々に明るくなってきて、急に泣き出す子もいなくなりまして。時々遠野に来た子どもがテレビに映ることがあって、それを見ては、『ああ、元気になってきているな』とうれしく

思っています」

被災地の子どもたちを自然豊かな場所では遊ばせる活動。一時的な夏のキャンプなどはいろいろな団体が実施していますが、定期的に続けている例はあまり聞きません。バスの送迎も含め、「事故が起これないように」と心配の多い支援活動でもあります。佐々木さんは『やらなきゃならない』という、半分義務みたいなものだったんです。やらなかったら、心が落ち着かない(笑)と言います。それはきつと、レクリエーション支援者にしかできない支援だと感じたからでしょう。

参加した子どもたちと先生方の言葉からは、子どもたちが伸び伸びと遊び、楽しんだ様子が伝わってきます。そして、「将来、自分もみんなの役に立ちたい」と感じた子どもが少なくなかったことも、この支援活動の大きな成果です。

バンブーダンス、大縄跳び、的当て、ボール遊びなど、さまざまな種目が行われた自然学校。子どもたちは、気に入った種目に何度も挑戦するなど、夢中で遊んでいました。



[恵みの森]自然学校に届いた言葉

自然学校に参加した子どもたちから、たくさんのお礼の言葉が届きました。その一部をご紹介します。

子どもたちからの言葉

- この3年間で、一番楽しかったです。ぼくも大きくなったら、みんなの役に立ちたいです。
- 私は、特に大縄跳びと輪投げが楽しかったです。大縄跳びで1回目は跳べなかったけれど、2回目で跳べてよかったです。
- 若いお兄さんお姉さんや外国の人たちもいっぱいいて、支援してくれているのを見て、とても感謝の気持ちを持ちました。ぼくも大きくなったら、人の役に立つようなことをいっぱいやりたいです。
- わざわざ、ぼくたちのためにおもしろい遊びを考えていただきありがとうございました。足がからまり、次のステップにいけなかったバンブーダンス、もう一度やってみたいです。
- 学校では、仮設住宅でなかなか走り回ることができないけれど、親子レクをしてとても楽しかったです。心に残る思い出になりました。
- 一緒に遊んでもらったサッカーチームの人と、すごく仲良くなってうれしいです。ぼくのこと、忘れないでください。またサッカーしたいです。相手になってください。

引率の先生からの言葉

- 子どもたちは、一緒に行ったゲームを休み時間に行ったり、一緒に活動してくださったボランティアの方の名前を出して楽しかったことを振り返ったりと、まだまだ余韻に浸っているようです。今後とも、このような機会があればまたぜひ参加させていただきたく存じます。
- 校庭のない仮設住宅で学んでいる子どもたちは、広いフィールドで思いきり体を動かすレク体験を満喫していました。心温まる対応を受けた子どもたちは、ボランティア精神の大切さや尊さについて考えるよい機会ともなりました。
- 親子での食育ゲーム、ピザづくり、外遊び……。子どもたちにとっても、お家の方々にとっても、とてもよい時間となりました。笑顔いっぱいの子どもの姿が、うれしかったです。
- 普段の学校生活では体験できない貴重な体験をさせていただき、参加した親子みんなが大変満足しておりました。

[恵みの森]自然学校の1日の流れ

- 08:00頃 被災地を出発
- 10:00 遠野市に到着。日程説明
- 10:15 子どもたち、親、ボランティアの交流ゲーム
- 11:45 お昼(ピザづくり)
- 12:50 あそびタイム(チャレンジ・ザ・ゲームなどに挑戦)
- 14:40 かえりの会。写真撮影
- 15:00 遠野市を出発
- 17:00頃 帰宅

[下]自然学校の打合わせをする菊池厚子さん(写真右)。最初の頃は「スタッフと二人組になって」と言っても、家の人から離れたがらなかった子どもたちが、今は「早く! 早く!」と、スタッフを引っ張っていくほどになったと言います。



[上]親のためのプログラムを行う、遠野市レク協会会長の藤村正子さん。1年目は、みなさんふさいでいて話しかけるにも気を遣ったけれど、年々明るくなっていったと話す、藤村さん。「今、こうやって生きていくしかないという思いに変わっていったのかもしれない」と、参加者の気持ちを想像します。

[右]ゲームで子どもたちと手をつなぐ、佐藤順子さん。「被災地の子どもたちは、地元でどんなに大変かわからないけれど、遠野の子どもより明るい。子どもたちなりに明るくしていたのかもしれないけれど」と話します。参加したばかりの頃はとても緊張したそうですが、「参加して良かった」と笑顔を見せてくれました。

